

## 近代アメリカ女性の服作り——針仕事・パターン・通信教育

平芳裕子

神戸大学准教授

### **Women and Dressmaking in Modern America**

**Hiroko HIRAYOSHI, Associate professor, Kobe University**

This paper explores the transition from the era when clothes were made at home to today, a time in which ready-made clothes are easily available, by looking at needlework by American women, and guidance on dressmaking, together with patterns, contained in magazines, and correspondence education that played a significant role in women's acquisition of dressmaking skills.

In the pre-Industrial Revolution era, American women learned to sew from family members or people close to them and made clothes between household chores. Some women learned the necessary skills to make new clothes by using existing clothes as a model.

After the Industrial Revolution in the 19th century, substantial progress was made in women's skills to make clothes at home. Women who had been liberated from an enormous amount of manual labor obtained information on latest fashions and learned how to make fashionable clothes via regularly published fashion magazines, which enjoyed a wide circulation in those days. Women also obtained patterns essential to dressmaking from supplements to such magazines and specialized shops.

In the 20th century, correspondence schools appeared. Correspondence education played a significant role, in that such courses allowed women, regardless of age or where they lived, to acquire specialized dressmaking skills. The completion of such correspondence courses gave women self-confidence, paving the way to financial independence.

In 1938, the Woman's Institute Domestic Arts and Sciences, a representative correspondence school in the US, closed. This can be seen as representing the dawn of the era of ready-to-wear apparel. Mass production of clothes freed women from the need to make clothes at home. As a result, the mid-20th century saw a significant conceptual change in dressmaking from a kind of skill that women were required to develop to occupational education in fashion design. This heralded a new era in which dressmaking is not always a 'woman's job.'

## 1……はじめに——記されない「服作り」

「服作り」を「教育」という側面から語るには、ある種の困難が付きまとう。というのも衣服制作のための「裁縫」は、歴史的にほぼ唯一の女子教育であったにもかかわらず、教育が制度化されるにつれて、それはカリキュラムの周縁に追いやられていくからだ。女子ならば誰もが学んだ裁縫は、習慣の日常性と技能の普遍性ゆえに、いわゆる「正統的」な歴史記述からはこぼれ落ちてきた。それゆえ、服作りに関わる女性たちの振舞いの歴史は辿りがたいものとなっている（註1）。とはいえ、今日のように既製服を（容易に）買うことができなかつた時代において、「服作り」のための知識と技能を女性たちはどのように身につけたのだろうか。本論では、「アメリカ女性」の服作りに注目することで、その歴史の一端を明らかにしてみたい。

ところで、ヨーロッパの長い歴史に比して、近代国家アメリカの「服作り」を見ることの意義は、どのようなところにあるのだろうか。それはアメリカの歴史の「短さ」と国土の「大きさ」ゆえに、近代化される衣服産業に伴う女性たちの針仕事の変容を一挙に眺めることができることにある。アメリカでは、ヨーロッパの伝統的仕立てや職業組合のしきたりにとられない服作りの方法が積極的に考案され、（さらに重要なことには）実用化された。そして広大な国土ゆえに、それらを効率よく伝達する方法が発達した。新しい衣服制作の方法は雑誌で紹介され、新たに敷設された鉄道がそれらを都市から地方へと運んだ。ところが一方、国家の成長期に産業革命を迎えたにもかかわらず、荒野に住む人々は原始的な生活を営んでいた。すなわち、工業化以前の伝統的な裁縫と、現代に通じる合理化された衣服制作を同時に俯瞰することができるのだ。付け加えるならば、アメリカで確立された近代的な衣服制作のシステム、特にパターン（型紙）が日本の洋裁教育に与えた影響も小さくない。にもかかわらず、「服作り」の知識や技法を女性たちに伝えたアメリカのメディアやシステムは、これまでの服飾史や教育史では必ずしも注目されてこなかった。

そこで本論では、まず産業革命以前におけるアメリカ女性の伝統的な針仕事のあり方を、「裁縫」や「刺繍」という点から辿っていく。次に、19世紀の産業革命による交通手段と印刷技術の発達とともに、雑誌による衣服制作の手引き、すなわち服作りの特集記事や付録の「パターン」がどのように発展したのかを見ていく。さらに、女性たちの服作りの技能習得に大きな役割を果たしたと考えられる20世紀初頭の「通信教育」に光を当てる。以上、18世紀から20世紀にかけてのメディアの発展を通じて、女性たちがいかに裁縫を学び衣服を制作したのか、その経験の多様性を浮き彫りにしつつ、アメリカ女性の「服作り」について考えていきたい。

## 2……針仕事——18世紀から19世紀にかけての女子教育

アメリカに限らず、女性と衣服は長い関わりを持ってきた。原始的な社会においては男性が狩猟に出かけ、女性が家事や育児を担当した。なかでも針仕事は片手間にできていつでも容易に再開できるという性質から、家の中で生活する女性にふさわしい仕事と歴史的にみなされてきた。では、1776年にイギリスの植民地支配から独立を宣言したアメリカでは、女性たちはどのような針仕事を行っていたのであろうか。

建国から19世紀初めにかけてのアメリカは農業中心の社会であった。女性たちは家庭内のあらゆる家事を担当したが、当然繊維に関わる仕事の全般も請け負った。自分や家族が着るための衣服を用意することは必須のしごとであった。しかし衣服を縫うにも材料の準備から始めなければならなかった。まずは亜麻やコットンを栽培する。それらを収穫し、糸を紡ぎ、布を織る。もちろん服だけを作っていれば事足りたのではない。日常で使用する布類、ベッド用のリネンも必要だった。そして作るだけではなく、修繕もしなければならなかった。要するに、家庭内には膨大な縫い物があり、それらのすべてが手作業であったのだ(註2)。ではこれらの縫い物をするために、女性たちにはどのような教育が授けられたのだろうか。

女性たちは、家庭や学校での裁縫教育を通じて縫い物を覚えた。今日ではなかなか想像し難いが、女の子は5歳にもなれば基本的な縫い物はできた。それでは具体的に、どこでどのようにして縫い物を覚えたのであろうか。地域社会に学校が出来る前には、家庭内に存在する女性たち、大抵は母親や姉妹、親族らが縫い物や編み物を教えた。基本的なステッチ、印や模様つけ方など、まずは実用的な縫製の技術を身近な女性たちから学んだ。そして基本を学んだ後にはサンプラー(刺繍見本)を制作し、より高度な技術を身につけた。だが、家庭教育の余裕がない貧しい人々、働き口を探している人々、孤児などは、見習いや年季奉公、宗教団体による慈善学校で家事や裁縫を覚え、将来に使用人として働くための知識や技術を身につけた。彼女たちに裁縫を教えていたのは、裁縫の教師やお針子労働で生活を営む女性たちであった。一方、多少余裕のある家庭は、女性が子供たちを家に集めて開く地域の小さな学校に行かせた。期間は数カ月から数年間とまばらであったが、子供たちは裁縫や刺繍、絵描きだけではなく、読み書きも習った。さらに裕福な家庭は、上級の学校に子供たちを入れた。そこでは裁縫や刺繍だけではなく、ラテン語や歴史、地理、科学など、より高度な学問的内容も含まれていた(註3)。

では、縫い物の技術を身につけた女性たちは、どのようにして服を作ったのだろうか。裕福な家庭であればドレスメーカーに注文することができた。しかし大抵の場合は、友人に借りたドレスや手持ちの衣服をもとにして似た形の服を作った。布地の裁断は知識や経験が必要だったため、より高度な技術をもつ女性に依頼する場合もあったが、縫製は自分自身で行った。ようやく服が出来上がると、それは大切に着られた。この大人用の服が着古されると、次は子供用に仕立て直され、さらにそれも古くなると、家庭用の布地類に作り直される。原料から育てられ、糸から手作りされ、一針一針縫われた衣服は、徹底的に使い尽くされ、布地としての役目を終えた(註4)。そのため、日常生活の中で使用されていた布地や衣服は実証的な資料としてはほとんど残らない。ゆえに、女性たちの伝統的な手仕事＝裁縫も、歴史

的な記録や記述としては残り難い。しかし針仕事によって作られたすべてが消えたわけではない。先にもあげたサンプラーから、当時の女性たちの生活の一面を知ることができる。

18世紀から19世紀半ばの東部アメリカでは、サンプラーと呼ばれる刺繍見本がしばしば制作された (Fig.1)。基本的には手本に従って刺すことが推奨されたため、デザインの独創性を示すものは乏しい。だが、家中の大量の布類を区別するために家族の名前の頭文字を刺繍したように、アルファベットや数字だけでなく、動物、人間、草花、家々などのさまざまなモチーフが配された。その制作は単純な縫い物から、より高度な技術を習得するための訓練でもあった。そしてそれが素敵な作品に仕上がれば、家庭内に飾られ、装飾品としての役割も担った。サンプラーは、女性たちが自らの才能を発揮することのできる趣味的・余暇的要素をもつものであった。さらに自身の名前や制作した日付、あるいはちょっとした言葉や詩を添えることによって、生活の記録としての役割も果たした。それらは日常的な風景の再現であることによって、女性たちの日記ともなったのだ (註5)。

また、このサンプラーと似たような役割を果たした縫い物に「キルト」がある (Fig.2)。キルトもまたヨーロッパに由来するものであるが、開拓時代のアメリカにおいてあらゆる年代と階級の女性たちの手仕事としておおいに発展した。19世紀半ばに国土が西端に達したアメリカでは、東部諸都市の安寧な生活を手放し、ゴールドラッシュに湧く西部を目指して、多くの人々が移住した。強風の吹き荒れる荒野に住む人々にとって、暖かい寝具や布地類は必需品であったが、それらを家庭の女性たちが手作りしたのである。初期の時代には、家族の衣服を作る際に残った端切れや着古した服の使える部分が利用された。物資が貴重であった時代に、アップリケやピーシング (縫い合わせ) を駆使して、自然を抽象化した模様や幾何学模様が作り出された。出来上がったキルトは荒野の厳しい生活を耐える実用品であるとともに、家庭内を華やかに演出する装飾品でもあった (註6)。

このように、18世紀から19世紀にかけての女性たちは、あらゆる家事と並行しながら、膨大な針仕事を行っていた。家族の衣類や家庭内の必需品を得るために、手間のかかる単調な「裁縫」を延々と続けた。一方、同じ針を使う仕事でありながら、趣味と才能を誇ることのできる特別な「刺繍」を刺すこともあった。それらは家庭内を飾ったり、ドレスを装飾したりする作品でもあった。「服作り」のあめの針仕事は、家庭内を生きる女性たちに課せられた「労働」であり、女性たちのための「教育」であると同時に、女性が自らの技量や趣味や才能を発揮することのできる「表現」でもあったのだ。ところがこの伝統的な家庭裁縫のあり方は、19世紀の産業革命により、大きく変容していくこととなる。

### 3……パターン——19世紀の雑誌に見られる衣服制作

女性と「服作り」の関わりは、産業革命による機械化の進行によって大きく変化した。織機の改良と紡績機の発明によって布地の大量生産が可能となり紡績の仕事から多くの女性

たちが解放された。また 19 世紀半ばにはミシンも実用化された。すると衣服を作るための布地が市場に溢れ、一方で時間的余裕をもった女性たちが出現し、彼女たちが利用することのできる縫製道具も揃う。さらに印刷技術の発達により、女性誌が登場する。19 世紀前半の女性誌は比較的裕福な層を対象としていたため、パリやロンドンの流行を描いたファッション・プレートやファッション情報を中心としていた。しかし都市の発展と中流階級の増大を背景として、19 世紀半ばになると読者層が拡大し、記事の内容にも大衆化の傾向が見られるようになる。つまり、流行情報だけではなく、「衣服制作」の方法が話題となり始めるのだ。裕福な女性であればファッション・プレートと同じスタイルを街中のドレスメーカーに注文することができたが、中流階級にとって、家事労働の軽減で生じた余剰時間に服作りをすることは、家計の節約になった。同時に、家族のためのものを女性自身で手作りするところが、愛情の表現ともみなされた。その背景には、衣服制作における技術的発展があった。特に「パターン」が登場し、改良され、雑誌で紹介され、中流階級の家庭裁縫に対して大きな影響を与えることとなった。

それでは、アメリカの女性誌にパターンはいつ頃から掲載されるようになったのだろうか（註7）。パターン自体はヨーロッパで考案されたものである。しかし仕立屋の秘儀として受け継がれたヨーロッパとは異なり、アメリカでは雑誌を通じて広く一般に普及した。19 世紀に最も人気を博した女性誌『ゴードイズ・レディズ・ブック』に初めてパターンが掲載されたのは 1853 年のことである（註8）。それらは子供服のイラストとパターンであった（Fig.3）。袖と前身頃、後ろ見頃、サッシュの 4 点が描かれているが、合標となるアルファベットが記載されており、飾りもついている。一見、布地を正確に裁断するのは難しいように思われるが、それまでの女性たちが手持ちの服を参考にしながら服作りをしていたことを思えば、現実には即した方法であったといえるだろう。しかしこれらはパターンといえども印刷された縮図である。では、布地を切りとるためのガイドとなる実物大のパターンはいつ頃、出現したのだろうか？

女性誌 *Frank Leslie's Ladies Gazette of Fashion*（以下『フランク・レスリーズ』）が、綴じ込み付録としてパターンを添付したのは 1854 年のことであった（註9）。実際に付録を見てみると、本誌の間に薄紙が挿入されている。薄紙は折りたたまれ、一部が糊付けされているが、広げると雑誌一ページの四倍ほどの大きさとなる。この薄紙の両面にパターンが印刷されているが、誌面の大きさには限りがあるために複数のパターンが重なるようにして配置されている。しかし、それぞれ実物大であるため、形を正確に写し取ることが可能であった。内容を見てみよう。1854 年の 1 月号には“Pattern for a French Waist”（「フランスの胴着のパターン」）が掲載されている（Fig.4）。表側の刺繍のパターンの印刷が透けて見えているため判別しづらいが、裏側には胴着を作るためのパターンが印刷されている。そして、図の上に薄紙を重ねてそれぞれのパターンを写し取るよう指示書きも添えられている。2 月号では、表面には「Cessawuck（原文ママ）のパターン」と題されたパターン、裏面には「子供服のパターン」が添付されている（Fig.5）。本誌の記事による説明では、前者が「デモレスト夫人によってデ

ザインされた」ボディスのパターンであると明記されている。前月号のパターンと比べると、図のそれぞれに番号が振られており、利便性が高まっていることがわかる。次の1854年3月号には、「デモレスト夫人によって考案されたマンティラのパターン」が添付されている。さらに4月号では「デモレスト夫人によるバスクのパターン」、5月号では「少女のためのマンティラのパターン」、6月号では「子供服のためのパターン」と続く(註10)。ところで、パターンの制作者としてしばしば「デモレスト夫人」の名前が挙げられているが、彼女はどのような人物だったのだろうか。

「デモレスト夫人」とは、服飾雑貨商デモレスト氏の妻のことである。デモレスト氏が妻とともに営んだ店の名が「デモレスト夫人の専門店 (Mme. Demorest's of Fashion)」であった。「デモレスト夫人」の名で発表された初期のパターンについては不明な点も多いが、実のところ、そのアイデアは1850年代からデモレスト氏に雇われ、のちに後妻となったエレン・カーティスのもものと見なされている。ではこの「デモレスト夫人」ことエレン・カーティスがアメリカにおけるパターンの考案者であったのかというと、必ずしもそうとは断言できない。だが当時、さまざまなドレスメーカーがパターンの改良に取り組むなかで、「デモレスト夫人」はさまざまなアイデアとスタイルを加味して人気を博したと言える。1860年代には「デモレスト夫人の専門店」はブロードウェイを拠点として全国に支店を構え、さらに専門店によるファッション誌 *Demorest's Illustrated Monthly and Mme Demorest's Mirror of Fashion* (以下『デモレスツ・マンズリー』) の出版を開始した(註11)。ファッション専門誌として登場した『デモレスツ・マンズリー』は画期的な雑誌であった(Fig.6)。従来は女性誌は、物語や詩歌、家事やレシピなどとともなうファッション・プレートや流行情報を掲載するものが多かった。そこで『デモレスツ・マンズリー』も女性誌顔負けのファッション・プレートを掲載し、流行のパターンを掲載し、その制作の方法を具体的に教示し、さらに専門店でパターンを販売したのである。

とはいえ、服飾雑貨店によるファッション専門誌であったため、主たる読者はドレスメーカーが多かったとみられる。しかし先の女性誌『フランク・レスリーズ』がデモレスト夫人のパターンを添付し、『ゴーディズ・レディズ・ブック』が「デモレスト夫人」のパターンを積極的に紹介し、「デモレスト夫人の専門店」を宣伝し、また『デモレスツ・マンズリー』で紹介された衣服制作の方法を特集記事にした。つまり『デモレスツ・マンズリー』の直接の読者ではなくとも、同時代の人気女性誌が「デモレスト夫人」の衣服制作の手法を紹介することで、多くの女性読者が全国各店で販売された「デモレスト夫人」のパターンを使って服を作ることができたと考えられる。ではこれらの女性誌で紹介された「デモレスト夫人」の衣服制作の新しいアイデアとはどのようなものだったのだろうか。それは、採寸の仕方とサイズ別の型紙の使い方を体系化したことにある。つまり、身体の寸法をどのように測って体型に即した原型を作るのか、その手法を確立したのである。現代の私たちから見れば、この服作りの基本を「衣服裁断の科学」と称するのは少々大袈裟なような気もするが、それ以前の女性たちが手持ちの服をもとにして服作りをしていたことを考慮するならば、極め

て実用的かつ合理的な方法の提案であったと言えよう。ファッション研究において「デモレスト夫人」とその専門店やファッション誌が注目されるのは、主としてパターン産業史においてであり、ファッション誌研究ではほとんど言及されない。だが、印刷メディアによるパターンの普及において先駆的な役割を果たしたと言える。では次に、このパターンをより広く普及させたファッション誌『ハーパーズ・バザー』を見ていこう。

現在でもファッション誌として有名な『ハーパーズ・バザー』は、出版者ハーパー兄弟により創刊された(註12)。パリやニューヨークの流行情報を記事にし、流行のスタイルをファッション・プレートやイラストレーションで紹介し、それらを実際に制作するためのパターンを付録とした。「デモレスト夫人の専門店」のように実際の販売店舗があったわけではなかったが、「流行のファッション」とそれを作るための「パターン」情報をいわばセットとすることで人気を博した雑誌である。『ハーパーズ・バザー』におけるパターンの取り扱いとその発展についてはすでに別稿で論じているので、ここでは要点を簡潔に述べておきたい(註13)。『ハーパーズ・バザー』の付録の特徴としては、かなり高度なパターンが添付されていたということだ。同時代あるいは少し後の『ゴードィズ・レディズ・ブック』や「デモレスト夫人の専門店」のパターンと比べてみると、それは一目瞭然である(Fig.7)。片面に数点のパターンが印刷されただけのパターンに対して、『ハーパーズ・バザー』の付録には薄紙の両面に25以上のパターンが印刷されている(Fig.8)。パターンそれぞれに対して異なる種類の線が用いられ、一つのパターンを間違えずに写し取るだけでもかなり根気のいる作業である。しかもただ線をなぞれば良いのではない。A1大という限られた紙のサイズにパターンを配置するために、パターンによっては折り畳まれた形状が印刷されており、読者自らが図を展開する必要があるものも含まれていた。つまり、『ハーパーズ・バザー』のパターンを利用するには、それなりの知識と経験が必要だったと思われる。とはいうものの、もし自分でパターンを写し取ることができなかつたとしても、このパターンをもってドレスメーカーに服を注文することもできたし、器用な知人女性に手伝いを頼むこともできた。なにより流行のスタイルを作るための情報が薄紙の両面に凝縮されているのである。当時の女性たちにとっては、垂涎の一枚であったことだろう。雑誌の通信欄を見てみると、読者がパターンを用いて服作りに励んでいた様子が伺える。通信欄に記されたのは読者の手紙に対する編集部への回答であったが、パターンの種類を尋ねる手紙やパターンの使い方に関する質問が毎回多く編集部へ寄せられていたことがわかる。

このように、『ハーパーズ・バザー』はパターンの付録で人気を博すが、毎号の雑誌巻末では多くのパターン専門店の広告も掲載された。なかでも注目されるのがジェームズ・マッコール(James McCall)である。もともと仕立屋だった彼は、雑誌『クイーン』の発行を始め、1884年には30万部の販売部数を誇るまでとなった。それもこの時代に流通したパターンの一部にすぎないことを考慮するならば、パターンの驚異的な普及を物語る数字である(註14)。またパターンの改良も進んだ。雑誌に印刷された縮図、薄紙に印刷された実物大のパターンに加え、実物大にカットされた薄紙のパターンも登場する。「デモレスト夫人の専

門店」によるパターンを見てみよう (Fig.9)。封筒入りのパターンであるが、表側にパターンの名称、出来上がりのスタイルがイラストで描かれ、裏側には簡単な説明が記されている。封筒の内側は「デモレスト夫人の専門店」に関わる雑誌や商品の宣伝が印刷されている。そして、封筒のなかに薄紙の実物大パターンが入っている。それらはあらかじめ裁断する形にカットされているため、雑誌の付録に印刷されたパターンのように、図を写し取る必要はなく、布地にパターンを置いてすぐに裁断に取り掛かることができた。パターンを取るための複雑な工程が取り除かれ、手間や時間を短縮して、より気軽に服作りに着手することができるようになったのだ。

19世紀後半にはパターン会社が次々と創設され、1900年には11社に達した(註15)。なかでも「バタリック (Butterick)」はパターンを販売するだけでなく、衣服制作のための専門書も出版し、版を重ねた(註16)。女性たちの裁縫の技術が向上すれば、パターンの販売増加も期待することができたため、専門書は販売促進のツールでもあった。衣服の種類や流行のスタイルに合わせて、多数のパターンが様々なパターン専門書から発売された。商業経済の発達と消費社会の発展とともに、女性たちは流行情報ばかりでなく、実際に流行を取り入れる手段としてのパターンを獲得し、流行りのスタイルを自ら取り入れていったのだ。

#### 4……通信教育——Women's Institute Domestic Arts and Sciences の設立

これまで主として家庭裁縫に焦点を当ててきたが、学校教育において「裁縫」はどのように教授されてきたのだろうか。19世紀後半になると大学の教育課程に家事経済が誕生した。20世紀に入ると家政学の教科書や専門書が出版されるようになり、衣服原料・繊維素材、紡績の方法と歴史、服飾様式の変遷、裁縫と服作りの技術が論じられるようになる(註17)。そして20世紀前半には中学校や高校などの公立学校で料理や裁縫を含む家政学の授業が行われるようになった(註18)。体系化されたカリキュラムのなかで衣服制作の知識と技術が体得されるようになる。しかしここではそれらとは異なり、より多くの女性たちを「服作り」へ誘った「通信教育」を取り上げたい。雑誌の付録や通信販売のパターンを通じて家庭裁縫が促進されたように、郵便システムを利用した教育普及がアメリカ女性の服作りの習慣形成における一つの大きな特徴であると考えられるからだ。ところがこの通信教育自体、アメリカの服飾史やファッション研究においてもそれほど注目されてこなかった。そこで、20世紀はじめに設立された Women's Institute Domestic Arts and Sciences (家政学婦人協会) の活動を紹介しながら、通信教育による「服作り」の普及について見ていこう。

Women's Institute Domestic Arts and Sciences (以下「ウーマンズ・インスティテュート」) は、1916年にペンシルベニア州スクラントンで設立された。創設者はメアリー・ブルックス・ピケン (Mary Brooks Picken) である。1888年にカンザスの農場で生まれた彼女は、幼少時から優れた針仕事の才能を示し、5歳の時にはすでに紡ぎ、織り、縫うことができ、11歳の頃には生ま

れてくる兄弟の衣服や身の回りの布類一式を制作したという。1906年に夫となるハリー・O・ピケンと結婚したが、若くして未亡人となった彼女は、縫い物やドレスの製作を女性たちに教えて生活の糧を得た。ペンシルベニア州の北東にあるスクラントンにやって来たのは1914年。20世紀はじめに製鉄・炭鉱でおおいに発展した産業都市スクラントンに設立されたのが「ウーマンズ・インスティテュート」であった(註20)。ピケンによる学校紹介のリーフレットから、当時の「ウーマンズ・インスティテュート」の様子を見ていこう。

「ウーマンズ・インスティテュート」は、衣服制作(dressmaking)を女性たちに教えることを目的として設立された。初めての生徒が登録されたのは1916年である。対象とする生徒は「あらゆる場所の、しかも自分の家に住んでいる」すべての女性たちであった。社交界を楽しむ女性から人里離れた大草原の主婦まで、様々な生活を営む12歳から70歳までの幅広い年齢層の女性たちが参加した。(リーフレットが出版された)1922年頃には、実に8万5千人以上もの生徒が登録されていたという。その内訳を見てみると、午後や夕方に学ぶ主婦が約5万人、働きながら夜に家で学ぶ女性たちが1万人、休暇を利用して学ぶ生徒や教師が3千人であった。別の冊子には、立派な学校のイラストが描かれているが、ここで作業をしていたのはスタッフたちであった(Fig.10)。このように「ウーマンズ・インスティテュート」最大の特徴は通信教育の学校であったことにある。そのため、服作りについて学びたいという女性たちの動機さえあれば、生徒がどこにしようと問題なかった。実際、メイン州からカリフォルニア州まで毎日200人ずつ新たな申し込みがあると述べられている。

それにしても、なぜそこまで多くの女性たちの関心を引くことができたのだろうか。それは「ウーマンズ・インスティテュート」の通信教育が、女性たちの各々のニーズに応える柔軟な選択肢を提供したからだといえよう。リーフレットには、従来の裁縫教育や職業訓練における欠点が指摘されている。例えば、大都市であれば衣服制作を学ぶ学校はあるが授業料が高額であること、にもかかわらず大規模クラスでは生徒一人一人まで目が行き届かないことが指摘されている。一方、ドレスメーカーの見習いという方法もかつては一般的であったものの、現在(当時)ではよい店ほど即戦力となる人材を雇用する傾向にあること、そしてたとえ職を得たとしても反復作業ばかりで様々な技術を身につけることが困難である状況も指摘されている。それに対して、「ウーマンズ・インスティテュート」の通信教育は「自分自身の家を教室に」して学ぶことができる。リーフレットには、子供のそばでミシンをかける母親の姿、またリビングでくつろぐ両親の傍で教材を広げる若い女性の姿のイラストが添えられている(Fig.11)。いわば、伝統的な針仕事の特性に即して「服作り」を学ぶ環境を実現させたのが、「ウーマンズ・インスティテュート」の通信教育だったのだ。育児や家事の合間に縫い物をしたように、日常的な仕事の合間に学習者自身のペースで進めることが可能であったことに、新しくまた大きな魅力があった。さらに、多くの女性たちが服作りの技術習得と向上を目指した背景には、流行の衣服や質の良い衣服に対する社会的需要の高まりがあった。

当時、既製服はすでに登場していたが、個々人の好みや体型にフィットするものを見つけ

ることはなかなか難しかった。しかし良いドレスメーカーに服を注文すれば高くつく。そこで自分で流行の服を仕立てることができれば、生地代だけの出費で済む。通信教育を初期投資として、一度衣服制作の技術を習得してしまえば、のちには恒常的に衣服代を節約することができる。さらに自分のものだけではなく家族や子供の衣服、いや他人の衣服をすることもできる。家計の節約だけではなく、衣服制作で収入を得ることだってできるのだ。家庭にしながら縫い物の仕事を請け負うこともできるし、ドレスメーカーとして店を構えることもできるだろう。リーフレットには、そのような様々な可能性が述べられている。“だがそんな都合の良い話があるだろうか？”と訝る読者の存在を想定してか、生徒の体験談も多数紹介されている。たとえばマサチューセッツで店を開いた生徒の手紙を見てみよう。

「仕事はゆっくりやってくると思っていましたが、百通の案内状を送ったところ、次の日には8人の顧客が注文に来たのです。(中略) 2ヶ月半で経費を別にして500ドル以上の利益がありましたし、8月1日までに35着のドレスを仕立てなければなりません。」  
(註21)

または、ドレスメイキングの講師として教室を開いたというミネソタ州の生徒の手紙を見てみよう。

「インスティテュートに入会してからすぐのち、私は近所の方達に縫い物を教えるようになりました。そのなかに校長先生の奥様がいらしたのです。校長先生は私の手仕事にたいそう興味をもってください、公立学校のクラスで教えて欲しいとおっしゃいました。教師の経験はありませんでしたが、インスティテュートの教科書を使って難なくこなしました。午前中だけの授業で月50ドルいただき、午後は自分のドレスを制作しました。教育委員会はとても良くしてください、今年は午前午後と教えて月90ドルいただきます。」(註22)

それでは実際、この通信教育の内容はどのようなものだったのだろうか。主たるコースは、婦人服・注文服総合コースと婦人服コースの二つであった。前者は衣服制作の基礎から応用までを総合的に学ぶ38回のコースで、後者は前者のコースから基本を抽出した簡易版のコースであった。どちらのコースも市販のパターンを利用して服作りを学ぶ点に大きな特徴があったが、両コースの最大の違いは作図の訓練を行うか否かという点にあった。衣服制作全般の知識と自分でパターンを引く技量を身につければ、他人の体型と要望に合わせて衣服を制作することができる。つまり、ドレスメーカーとして顧客を取って商売を始めることが可能となる。しかし自分や家族の服を作る分には、市販のパターンを利用するだけで十分である。受講者の望む技術的レベルに応じて、二つのコースが設定されていた。郵送された教材を見てみよう (Fig.12)。テキストは6×9インチ (約15×22センチ) で、受講回により32頁

から 64 頁ほどであった。家庭内での学習のために持ち運びのしやすい大きさと厚さで作成されていた(註23)。またテキストだけではなく道具一式も送付された。リーフレットのイラストには、定規やテープメジャー、パターンも掲載されている。受講者はミシンさえ準備していれば、あとは好みの生地を購入するだけでよかった。

コースの学習期間は標準的には 3 年ほどと設定されていたが、受講者は自分で学習のペースを調整することができたため、なかには 8 ヶ月で終えた生徒もいるという。では受講者は一方的に送付される教材を読み進めるだけでよかったのだろうか。「ウーマンズ・インスティテュート」の建物には 1923 年当時 450 人ものスタッフがいたが、「通信教育」であるがゆえに、生徒と教師が向き合う直接の対面指導が行われたわけではない(註24)。そこで入会希望者は、質問フォーム(Personal Information Blank)への回答が義務付けられていた(註25)。たとえば年齢や家族構成、性格などに関する個人情報、裁縫の経験や自身の体型またはサイズに関する情報をあらかじめ提出させることによって、教師側は受講者のひととなりやニーズの理解に努めようとしたのである。では、受講者が習得した知識や取り組んだ課題の達成度はどのように判断されたのだろうか。受講者はテーマごとに、学習内容の理解を測るための筆記テストに解答し、それを課題の縫い物や一部のサンプルとともに郵送した。小さめの封筒には筆記テスト、大きめの封筒には受講者が実際に制作した縫い物が入れている(Fig.13)。また、解答用紙は送付用の封筒とともに教材一式のなかに含まれており、追加購入が可能であった。提出物が「ウーマンズ・インスティテュート」に到着すると、通常は三、四日で教師たちによる確認が行われた(註26)。ここで教師たちはただ採点しただけではなく、解答内容に即したコメントも付した。

これら受講者の解答用紙の一部が、ニューヨーク州立ファッション工科大学の附属図書館スペシャル・コレクションに保管されている(Fig.14)。教師のチェックとコメントも付されているが、採点後になんらかの事情で返送されずに残されたものと見られる。8 枚の解答用紙のうち 2 枚はミシガン州、残る 6 枚はペンシルベニア州に住む受講者のものである。解答された教材テーマは「刺繍のステッチ」「下着」「エプロンと帽子」「ドレス応用」など様々である。しかし、どれも用紙の両面に約 20 問にわたる解答がびっしりと記されている。解答内容から、設問には素材の説明、技法の目的、生地扱いに関する問いがあったと想定される。教師は各解答が正しければ、番号に赤ペンでチェックを入れる。間違っている場合には、アドバイスや指示が添えられた。たとえば「パターン・ガイドを使うときはゆとりがないことを覚えましょう。第 122 節を参照してください。」といった指摘が見られる。そしてどの解答にも最後には、全体的な講評が記された。「よくできました」という簡潔なものもあるが、なかには「課題に優れた進歩が見られます。この本に記されている服の構成と仕上げは様々な応用することができます」といった丁寧なコメントも見られる。

受講者は、教材の順序に従い学習を進め、確認テストと課題を提出し、コースの全課程を終える。そして最終試験に合格すると「修了証書」が授与された(Fig.15)。証書はドレスメーカーキング部門長や主任教師らの署名入りで、それなりの大きさのものである。専門店を開く場

合には証書を店内に飾ることもできたし、そのような機会がなかったとしても、受講生たちの知識や技術の確実な習得を保証する証明書としての役割を果たしただろう。このように、「ウーマンズ・インスティテュート」は通信教育を通じて多くの女性たちに「衣服制作」の知識と技術を伝授した。しかし多くの修了生を出した同校も、1938年にその役目を終えることとなる(註27)。

## 5……おわりに——職業教育としてのファッション・デザインへ

これまで18世紀から20世紀はじめにかけてのアメリカにおける女性と衣服の関わりを「教育」という観点から見てきた。その歴史から浮かび上がるのは、「衣服制作」を学ぶ女性たちの教育プロセスが、他の実践とも分かち難く結びついている様子である。

産業革命以前には、女性は様々な家事とともに、糸や布とともに衣服を作った。幼い頃から針を持ち、家族や身近な人々から裁縫を習い、様々な技術を身につけた。そしてすでにある服をもとにして、ドレスメーカーや友人を頼りとしながら新しい服を縫った。19世紀に入ると産業革命の影響下に手作業であった工程が機械化され、膨大な手仕事から女性は解放された。定期的に出版される雑誌が、新しい衣服のスタイルと作り方を伝え、それらを作るための手段であり道具となるパターンが雑誌付録や専門店を通して流通した。裕福な女性はドレスメーカーに注文したが、家庭内で「服作り」をするための道具や技術も格段に進歩した。さらに20世紀に入ると通信教育が登場した。いまだ身近な女性から習うことも可能であったし、公立学校でも家政学に関する授業は行われた。しかし様々な地域のあらゆる年齢層の女性を対象としていた点において、通信教育の果たした役割は大きかった。産業革命以前の女性たちが家事の片手間に糸を紡いだように、育児や仕事をしながら空いた時間を利用して「服作り」を学ぶことが可能であったからだ。衣服制作の知識と技能を身につけることによって、女性たちは家計の節約を試みると同時に流行を取り入れた。かつての針仕事は「労働」と「家事」と「教育」と「表現」と分かち難く結びついていたように、「衣服制作」は女性たちの仕事や存在そのものと強く結びついていた。女性は「服作り」を通して自信を獲得し、経済的自立への道も切り開いた。通信教育の修了証書は、彼女たちに対する社会的信頼を育んだだろう。

しかしながら、一時代を築いた「ウーマンズ・インスティテュート」の閉校は、既製服時代の本格的な到来を象徴的に示す出来事であっただろう。衣服の製造技術が向上し、既製服の普及が進むと、家庭で衣服を手作りする必要はなくなる。同校が閉校した時期、それは職業としてのファッション・デザインへの注目が高まりを見せた時代でもあった。実際、1930年代になると『衣装デザインとイラストレーション』(1932年)『ファッション・ドローイング・テクニク』(1933年)『ファッション・イラストレーション』(1937年)『ファッションデザイナーになるには』(1941年)といった専門書が続々と出版され始める(註28)。20

世紀半ば、「衣服制作」は女子教育としての「服作り」から職業教育としての「ファッション・デザイン」へと変質していくこととなる。それは、衣服の制作が必ずしも「女性の仕事」ではなくなる時代の予兆であったと言えるだろう。

[註]

1. 卑近な例を紹介するならば、筆者が所属する神戸大学の国際人間科学部は、旧発達科学部、さらに以前は複数の師範学校であり、その一つには「裁縫科」があった。ところがこの師範学校に遡る裁縫教育がのちの大学教育にいか「縫合」されていったのかについては、実のところ、神戸大学史として正規に出版されている書物のなかには記されていない。それどころか「裁縫」や「家政」に関わる内容は省略される傾向にある。詳細については次の拙論を参照。「神戸大学に見る衣服史の諸相—師範学校・教育学部・発達科学部から国際人間科学部へ—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第10巻第2号、2016年、pp.211-219.
2. Susan Burrows Swan, *Plain and Fancy*, New York; A Rutledge Book/Holt, Reinhart and Winston, 1977, pp.18-23. なお19世紀アメリカにおける家庭裁縫については次の拙論を参照。「女工・お針子・家庭裁縫—19世紀アメリカのファッション文化における女性」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、2013年、pp.43-50.
3. Gloria Seaman Allen, *A Maryland Sampling*, Baltimore, Maryland: Maryland Historical Society, 2007, pp.7-21.
4. Swan, *op.cit.*, pp.18-23.
5. バット・フェレロ、エレイン・ヘッジズ、ジュリー・シルバー『ハーツ アンド ハンズ アメリカ社会における女性とキルトの影響』小林恵、悦子・ジガベナー訳、日本ヴォーグ社、1990年、p.11.
6. *Ibid.*, pp.50-57.
7. アメリカにおけるパターンの歴史的展開と解釈については次の拙論を参照。「モデルに倣う—ファッションにおけるパターンの出現」『表象』第11号、2017年、pp.50-57.
8. *Godey's Lady's Book*, Philadelphia: L.A. Godey. (以下 *GLB* と略記) 1830年に“Lady's Book”として創刊、1837年にタイトルを改名、以後1898年編んで出版され続けた19世紀アメリカの代表的女性誌である。年間購読料は3ドル、発行部数は1840年頃の2万5千部から南北戦争直前までには15万部に達した。なお同誌が掲載したファッション・プレートについては次の拙論を参照。「フィラデルフィア・ファッション—『レディズ・ブック』における良き女性の表象」『服飾美学』第47号、2008年、pp.55-72。「正統なるファッションとは—『ゴードィズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説」『美学』第60巻第2号、2009年、pp.84-97.
9. *Frank Leslie's Ladies' Gazette of Fashion*, New York: Frank Leslie, 1854. (以後タイトル変更有。) 発行部数は南北戦争後の5万部から徐々に減少。
10. 調査はNY州立ファッション工科大学附属図書館スペシャル・コレクションで行った。同誌にはさらに、1855年8月号に「デモレスト夫人による子供服のパターン」、同年9月号に“プリンセス”の秋のマントイラのための実物大パターン」、同年10月号に「デモレスト夫人によるマントの実物大パターン」、1856年7月号に「デモレスト夫人によるマントイラとショールのパターン」、同年12月号に「デモレスト夫人による上着 (Paletot) のパターン」が掲載されている。
11. *Demorest's Illustrated Monthly and Mme Demorest's Mirror of Fashion*, New York: W. Jennings Demorest, 1865-1899. 年間購読料3ドル (のち2ドル)、発行部数は約5万部。当初はドレスメーカーや商人を対象とする専門誌であったが、専門店での販売や同時代の女性誌による紹介から人気を博したと考えられる。
12. *Harper's Bazar* (spelled Bazaar since 1929), New York: Harper's & Brothers. 創刊から十年で発行部数8万部を達成する。当初タイトルは *Harper's Bazar* であったが、1929年に英語風の表記 *Harper's Bazaar* に改められた。なお、日本語表記についてであるが、2000年からセブンシーズ・メディアアンドマーケティングによって出版された日本版の正式タイトルは『ハーバース・バザー』であった。しかし同誌は2010年に休刊し、その後、2013年からハースト婦人画報社により『ハーバース・バザー』のタイトルで再び出版されるようになった。そのため、本論では現在の日本版正式名称に倣い、『ハーバース・バザー』と表記する。
13. 『ハーバース・バザー』のパターンがアメリカにおけるパリ・オートクチュールの受容において果たした役割については拙論「パターンによる流行受容—初期『ハーバース・バザー』の重要性」『デザイン理論』第68号、2016年、pp.21-34を参照。『ハーバース・バザー』のパターンには、パリのオートクチュール店のスタイルに倣うものも掲載された。裕福な女性は本物のオートクチュールを注文することができたが、一般女性たちも『ハーバース・バザー』のパターンを利用することによって、ウォルトやパンガによるオートクチュールの流行を取り入れることが可能だった。

14. Kathleen L. Endres and Therese L. Lueck, eds., *Women's Periodicals in the United States*, Westport and London: Greenwood Press, 1995, p.219. なお『クイーン』(*The Queen: Illustrating McCall's Bazar Glove-Fitting Patterns*)の最初の号が出版されたのは1873年であった。(以後タイトル変更有)
15. Joy Spanabel Emery, *A History of the Paper Pattern Industry*, London and New York: Bloomsbury, 2014, p.73.
16. バタリックは、1911年および1916年に *The Dressmaker* (New York, London, Paris: The Butterick Publishing Company)を出版したのち1921年には *The New Dressmaker*, 1927年には *The New Butterick Dressmaker*, 1930年には *Making Smart Clothes*とタイトルと内容を改訂しながら、衣服制作の手引きを出版し続けた。
17. 例えばシカゴ大学講師であった Kate Heintz Watson, *Textile and Clothing*, Chicago and Illinois: American School Household Economics, 1904、コロンビア大学准教授の Laura I. Baldt, A. M., *Clothing for Women*, Philadelphia, London, Chicago: J. B. Lippincott Company, 1929、ミネソタ大学准教授の Clara M. Brown, *Clothing Construction*, Boston and others: Ginn and Company, 1927の著書を参照。
18. キャサリン・ビーチャーが『家事経済について』(*Treatise on Domestic Economy*)を出版したのは1841年、カンザス州立大学が同名の教科課程を始めたのは1873年である。1909年にはアメリカ学会は発足し、少女のための家庭管理教育を推進した。20世紀前半には、公立学校で家政学に関する授業が行われるようになった。家政学教育の歴史については以下の文献を参照。セイラ・ステイジ、ヴァージニア・B・ヴィンセンティ編著『家政学再考』倉元綾子監訳、近代文芸社、2002年。
19. メアリー・ブルックル・ピケンについては次の文献を参照。Linda Przybyszewski, *The Lost Art of Dress*, New York: Basic Books, 2014; Josephine M. Dunn and Cheryl A. Kashuba, *The Woman of Scranton 1880-1935*, South Carolina: Arcadia Publishing, 2007. 彼女は衣服制作に関する百冊近くの著作でも知られ、メトロポリタン美術館衣装部門 (Costume Institute) 初期の役員であり、ニューヨーク州立ファッション工科大学の理事に指名された最初の女性であった。なお、メアリー・ブルックル・ピケンの文献資料に関しては、現在伝記を執筆中であるキャサリン・レスリー氏 (ケント州立大学准教授) に次の論文ならびに口頭発表原稿概要をご教示頂いた。Catherine Leslie, "Reviving Creativity and Innovation for a Sustainable Future: The One Hour Dress," *International Journal of Home Economics*, Vol.5, No.2, pp.208-226. "Their Roots were in the Heartland: Dressmaking Education by Correspondence in the Progressive Era." ここに記して感謝申し上げます。
20. 1921年の「ウーマンズ・インスティテュート」の記念式典には、ピケンとともに (彼女の第二の夫となる) G. Lynn Sumner も出席した。(Dunn and Kashuba, *op. cit.*, p.66) また19世紀から20世紀初めにかけてのスクラントンの都市の発展については次を参照。下村雄樹・福西和幸「19世紀アメリカ産業革命と地方都市発展—ペンシルヴェニア州スクラントンの産業とウェールズ系移民」『神戸国際大学紀要』第66号、2004年、pp.1-21.
21. Fashion Institute of Technology, Special Collections, USNNFIT, SC, 306, Mary Brooks Picken, "Woman's Institute of Domestic Arts and Sciences, Department of Dressmaking, Dressmaking Tailoring Pattern Designing," Scranton, Philadelphia, pp.26-27.
22. *Ibid.*, p.29.
23. *Ibid.*, p.40.
24. Fashion Institute of Technology, Special Collections, USNNFIT, SC, 306, "How to Start Studies," Woman's Institute of Domestic Arts and Sciences, Philadelphia: International Educational Publishing Company, 1923, p.1.
25. Fashion Institute of Technology, Special Collections, USNNFIT, SC, 306, Woman's Institute of Domestic Arts and Sciences, Papers, Circa 1922, Personal Information Blank, Woman's Institute of Domestic Arts and Sciences, Scranton, Pa.
26. "How to Start Studies," *op.cit.*, p.8.
27. Dunn and Kashuba, *op. cit.*, p.65.
28. Ethel Traphagon, *Costume Design and Illustration*, New York: John Wiley & Sons, Inc., 1932 (second edition); Mabel Lilian Hall, *Fashion Drawing Technique*, London: Sir Issac Pitman & Sons, Ltd., 1933; Gradys Shults, Christine Schmuck, *Fashion Illustration*, New York and London: McGraw Hill Book Company, Inc., 1937; *How to be a Fashion Designer*, New York: Robert M. McBride & Company, 1941.

### 平芳裕子 (Hiroko Hirayoshi)

1972年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。神戸大学准教授。2016-17年、ニューヨークファッション工科大学客員研究員。専門は表象文化論、ファッション文化論。共著に『西洋近代の都市と芸術—ローマ』(竹林舎、2013年)、『相対性コムデギャルソン論』(フィルムアート社、2012年)、論文に「パターンによる流行受容—初期『ハーバース・バザー』の重要性」(『デザイン理論』第68号、2016年、意匠学会論文賞)など。

(※肩書は掲載時のものです)